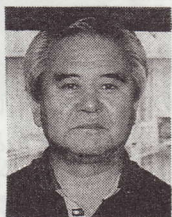


「友弾によせて」

大学生生活を射撃一筋に一その思い出

黒羽 真信 (70期)



私が大学に入学したのは昭和33年で、この三枚の写真は、大学一年の春に劇団「東俳」の入学願書に添付したもの、一年の夏合宿（山梨）でS Bでの立射の姿勢をしているもの、三枚目は昭和36年の三年次で、下級生が構内射撃場で地面の上にムシロを敷きA R伏射姿勢をとっているところであり、穴水主将と小生が指導しているもの（今の射撃場とは大きく異なり青空の下での練習風景—今の正門を入り左の図書館が建っている場所）であります。

大学に入ったのですから何を勉強しようか又、何をやろうかと思案しつつ構内を物色して歩き廻っていましたが、どうせ今からスポーツを始めるのであれば国体に出場できるものかと思ひ、高校時代から多少自身があつたテニス部を訪ねましたが硬式が無いとのことであきらめました。その時、校庭の隅でパチンパチンと空気銃を撃っているのに興味をひかれ入部することにしました。その銃は中折式のもので、少年の頃スズメを追いかけていたことがあつたので身近に感じたからかもしれません。しかし、他に経済学研究会と自治会委員（学校からクラス委員として指名されたもの）にも所属していたので、週二日の割振りで射撃練習に励みました。先輩からは変わった奴が入ってきたと思われていたようです。夜は、代々木にあった東俳（宝田 明や丹波哲郎、中原ひとみの出身）に将来の俳優を夢みて足繁く通ひ、演技の勉強に打ち込みました。

この時の射撃部は、森野知行先輩が主将、菊地宣之先輩が副主将、船井俊宏先輩がマネージャーだったと思います。部員数も10余名の少人数でしたが精鋭な人達が揃っていた時代だったと思います。射撃練習は前掲の青空射場で、標



的を隣のお寺とその境のブロック塀に固定し撃つという状況でした。標的を狙っているとお寺の木にハトやカラスが止まるので、つい撃落としてしまい、時々学生課に呼び出されては怒られる事もありました。又、この頃は銃に対する規制もおだやかであり、一挺の銃で何人も撃つ事ができる時代でした。

一年を通し、春・秋関や全日本は神奈川県営の富岡射撃場（全日本は隔年で大阪府警射撃場）でしたので、会場に近い旅館（屏風浦の雨月荘？）に二泊三日の合宿をしながら試合に出るという状況でした。旅館は各々の大学が常宿を決めていたので色々楽しい思いもあったようです。しかし一方、競技会運営は射撃場が狭い為にロングランになってしまい学連委員の大変な苦勞があったように思います。

大阪では、今宮戒神社（津江孝夫宮司）にお世話になりましたが、神殿の大広間での寝泊りは時期的には大変寒く、宮司さんから差入れの献酒で心が温まる思いをしました。

又、試合後はよく渋谷の百軒長屋の「くじら屋」で祝勝会と言っては飲み、残念会と言っては飲む等、酒豪の先輩が多かったようにも思います。

二年次は、三つの部会共に役責を持たされ、射撃部はマネージャーに指名され、他は組織委員長補佐、等と責任は重くなってしまいました。これでは週二日の割振りは出来なくなり大変悩みなした。その悩みを打消してくれたのが、森野主将の一言で「黒羽、お前は四月より関東学連へ行け」との厳命でした。命令には逆らえず、他の部会をやめて射撃一筋に打ち込むことになりました。学連では各大会毎に数十枚もの表彰状を書く仕事があり、たまたま私が高校時代に書道部の副部長をしていた事を法政大学の安藤マネージャー（高校時代の同級生で偶然にも射撃部に入っていた）が知っていて引っ張り出されたようです。学連での仕事は表彰状を書くことが専門となり三年間で約千枚位は書いたのではないかと思います。大学のレギュラーでもあったので、試合後の表彰式に間に合わせるために忙しく、大変な苦勞をしました。又、部のマネージャーとしては、部員の拡大、銃購入のための予算獲得、合宿費用の効率化等いろいろと取組むべき課題は多くありました。先ず最初に新入部員を多数入部させるため先輩に「20名は募集する」と豪語して、体育会の各部紹介が体育館で行われる当日は、部活の説明だけでなく三姿勢の実演をしてPRすることにしました。

勿論、ARとSBの実弾は使用せず空砲ということで学生課を説得し許可を得て行いました。実演は、標的を仮設して、SB1名、AR2名の陣容で新二年生部員に服装を整えさせ、伏射・膝射・立射の順で「構え、撃て」と号令を掛けて、引金を引かせました。パチン パーンと空砲が体育館に反響し一瞬静寂になったのを思い出します。このPRは大成功に終わったのですが後が恐かった事を思い出します。本当に部員は集まるのか。それが心配でした…が翌日から徐々に集まり始め、目標以上の25名が入部しました。大成功でした。先輩にも喜ばれましたが、それからが大変でした。服が無い、銃が不足、射場は最低で狭く、練習する人より見学者が多くなる状態となり日替わりで練習するようになりして工夫をしましたが、一度に部員が2.5倍にもなると統制もとれなくなり苦勞が増えました。又、銃購入資金集めは、学校からの助成金のアップは期待できず、先輩にお願いする以外になく、先輩に連絡し、会社の昼頃をお願いに歩いたものです。先輩も学生の顔を見ればまあ苦々しい顔もしますが、昼食をおごってくれて寄付金もはずんでくれました。本当に有難いことです。顔を出すことで先輩とのコミュニケーションも深まり、絆も太くなり、喜びや収穫は大きかったと思ったものです。

又、合宿については部員の出費をできるだけ少なくするため、休みの時はアルバイトでお金を貯め、合宿場所は、福島県郡山の自衛隊や静岡県富士演習場（富士学校）等をお願いして、一週間の経験入隊ということで自衛隊の人達と同じように服装・帽子・靴をお借りし、ハンモックのベットで寝起きし、射場までは行進して行って練習するという経験もしました。初めは食事のお米が外米のためポロポロして中々食べられない者もありました。

折角学生さんが来られたので「憲法九条について、どう考えているかレポートを出して欲しい」という宿題まで出されて、部員一人一人のレポートを添削して提出するということもありました。

三年次になると部では副主将、学連では副幹

事長、四年では関東学連、全日本の幹事長となつて大変忙しくなってきました。それこそ射撃一筋という状況になり、学校では勉学もさることながら射撃の練習、部下の指導、各大学の定期戦にも招待され出席する等体がいくつあつても足りない状態となってきました。

学連では、常に各大会を富岡射撃場で開催しますが射場が狭くなり、各大学の部員も増加してきた為射座の割振りが難しくなり、各大学の学連委員は個人戦の射座を一つでも増やそうと競い合う、大学の利益代表と化すことがあります。それを円満に行うためには学連の委員が強くなる必要があります、四年次には各大学から選ばれてくる委員を白紙に戻し、主将や副主将及びマネージャー級を委員として選んでくれるようお願いし、組織の強化を図ることによって重要案件が即決できるようになりました。又、これによって前述した射座の割振りも円満に解決できるようになると共に、これを機に一部二部制度を創設した訳ですが、当時は一部八校で他は二部とし、春・秋関東大会の開催を二週に分けて行い、多くの部員が撃てるようにしました。この制度が今の制度と大きく違うのは、試合の成績が良ければ二部校が全て一部に入替わる可能性があるとの制度であったことです。これは射撃人口を拡大していくためには必要な大改革でありました。勿論、この制度の中で当射撃部は二部に落ちることなど考えたこともありませんでした。

学連が強化され、二部制が敷かれることにより学連の委員も忙しくなりました。委員の中に各大学のレギュラーが多数居り、運営委員が不足するため多忙となると共に二週に亘り大会を運営することになったので大変な苦勞を味わうことになったからです。

私もレギュラーとして撃っており、その最中に採点が分かれたため幹事長兼競技委員長として決断をする相談があつたり、ある時には大学どうしのもめ事から某大学の応援団が射場になだれ込んできて仲裁をして事なきを得た等のエピソードもありました。

又、女性が増えてきたので女子の部を創設し

たり、高校連盟の創設にも日本ライフル射撃協会の方々と一体となって推進し、各大学の付属高校に働きかけをして実現させることもできました。これらの高校生に当時ローマオリンピック後、選手強化を図るためサーキットトレーニングを導入して、代々木体育館で月2回(?)位の日程で、これを指導し、自らバーベルを持ち上げたり、天井から吊下ろした縄梯子を登ったり、大変な役割をさせられたりしました。又、大学の未加入校に同好会を作るよう呼びかけ、実際に東大にも同好会を作つて試合に参加してもらつたり、それこそ大変な日々でした。当時、日大も射撃部創部の動きがあり、法政大学の桂さんをお願いして監督を引き受けて頂き、部の立上げに手助けをしたり、今思えば良く働いたものだと思います。

又、学連主催の各大会に後援を産経新聞にお願いし、産経杯のカップを頂いていたのですが、この産経新聞が経営が悪化したため出せない状況となり、急遽、読売新聞系の報知新聞にお願いし報知杯に変更することにする等いろいろな事がありました。

そうした中で、私自身も日本ライフル射撃協会主催の全日本選手権や昭和36年の秋田国体には茨城県代表で出場する等苦勞した中にも思ひ出多い4年間でした。学生時代での成績は、全日本ランキング17位が最高でしたが、それこそ射撃一筋の学生生活だったような気がします。

一方、二年次には松竹映画にも寸役で3本出演し、当時のスーパースターの佐田啓二や有馬稲子の素顔にも接することができ、すばらしい青春を謳歌しました。

私にとって、この4年間は苦勞の多い大変な時期でしたが、射撃部の諸先輩や他大学の人達並びにOBの方々の垣根のない交流や心温まる応援があつてこそこの苦勞を实らせ、ライフル射撃の歴史の一頁を作らせて頂いたものと思います。本当に感謝する次第であります。